

## T. S. エリオット研究の未発表一次資料をめぐって

The Outline of Unpublished Materials in Two Major T. S. Eliot Collections in the U. S.

進藤秀彦

### I

T. S. エリオットの没後20年にあたる1985年が近づくにつれて、エリオット研究も新しい段階に入りつつあるように思われる。作家や詩人の死後20年という、伝記や回想録が出版され、いくつもの新事実やら新資料が公表されて、作品の解釈もあるものは改められ、またあるものは大きく変わって、その人間像がある程度固まり、それまでの事実訂正、解釈訂正の作業から、本格的なテキスト中心の、作品そのものを見つめる時期に入る。

もちろん、以後も新資料の発見とか公表とかは続くであろうし、またそれによって解釈に新たな光が投げかけられるということも起きてゆくであろうが、いわゆる批評と実証的研究との相互のつり合いがとれて学問的な研究が安定期に入るのは、今世紀の詩人などの場合、ほぼこのころと言ってよいであろう。

エリオットについては、たとえば、かなり以前から準備が進められていると伝えられる書簡集の出版はもう少し先のことであろうし、T. S. Matthews がその伝記の中ではじめて紹介した、エリオットの Emily Hale あての1000通を越す手紙その他の資料は、ヘイル自身のプリンストン大学図書館への寄贈の条件として2020年まで一切公表されないことになっている。しかし、Lyndall Gordon のものをはじめとするいくつかの伝記、あるいは *The Waste Land* の原稿のファクシミリ版に付けられたエリオット夫人の序文などによって、彼の詩が置かれるコンテキストが、1960年代までとは大きく変わってきたことは事実である。そして、この伝記的研究の傾向は、書簡集の出版後まで、もうしばらく続いてゆくと思われる。

また、伝記的事実だけでなく、「事実としてのテキスト」を論ずる研究も、E. Martin Browne の

*The Making of T. S. Eliot's Plays* (1969) に始まり、さきの *The Waste Land : A Facsimile and Transcript of the Original Drafts* (1971) およびこれを論ずる数多くの研究、そして Helen Gardner による *The Composition of 'Four Quartets'* (1978) と、次第に主要作品の成立に関する実証研究が積み重ねられてきている。

こうした経過のなかでの1969年の *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* と Donald Gallup の *T. S. Eliot : A Bibliography*、そして1984年秋に予定されている *The Complete Poems and Plays* をもととしたコンコーダンスの出版は、エリオットの oeuvre をほぼ確定すると言ってよいであろう。エリオットは、エッセイや創作的散文を積極的に作品と考えたポール・ヴァレリーなどと違って、自分の書いたもののうち詩と詩劇のみを「作品」と考え、エッセイ自体は、特別なものをのぞき、自己の文学的、社会的主張の手段としてのものと考えていた。従って、われわれは、*The Complete Poems and Plays* をもって彼の全詩集、あるいは全作品集と考えることができよう。これは、*Collected Poems 1909-1962* (1963) と *Collected Plays* (1962) に *Old Possum's Book of Practical Cats* (1939) を加え、さらに *Poems Written in Early Youth* (1950, 1967) を Appendix として加えたものである。1920年の詩集 *Ara Vos Prec* に一度だけ載り、以後全く収録されない問題の“Ode”と、いくつかのいわゆる occasional な詩をのぞけば、これがエリオットの発表した詩と劇の全作品となる。

詩と劇はこうして約600ページの一巻本にまとめられているが、これに収められた個々の作品の初出や出版に関する記録、また、数多くの批評集と、それらに収録されたものやされなかったものすべての書誌、つまり、エリオットが残したすべての一次資料のほぼ完璧な書誌学的研究が、T. S.

*Eliot: A Bibliography* (1952, rev. ed. 1969)である。かなり詳細な description の付いたこのビブリオグラフィーによって、発表された全作品、全著述の全体像と書誌学的データを確認することができる。

文献学的編集の模範と謳われた、ドイツのゲーテ全集に倣ったといわれるわが国の岩波版『漱石全集』のように、いわゆる作品だけでなく批評、短文、日記、書簡、そして蔵書の書込みに至るまで、断簡零墨のことごとくを集めるといった全集が英米で出版されることはまずない。作品以外の文章は、その重要なもののみが選集として纏められ、専門的研究者や、何か特別な目的を持つ者のみが気にするような文章は、ビブリオグラフィーをたよりに雑誌や本や新聞にあたるというのが普通である。そして、エリオットの場合、現在入手できる形でまとめられている文章は、発表されたものの三分の一にも満たないであろう。ちなみに、詩や散文の初出の記録をなす、このビブリオグラフィーの Section C (Contributions by T.S. Eliot to Periodicals) に記載されたものの数は、編集者への手紙として掲載されたものやインタビューの記録、そして彼が編集していた *Criterion* の編集後記 (“A Commentary”) のようなものまで含めて681にのぼる。こうした数多くの文章の検索がこの書誌によって容易になり、また作品発表の正確なクロノロジーが得られるようになった。こうした意味で、この書誌はエリオット研究のうえでの総記的二次資料のうち第一に挙げられるものであって、批評的研究にも、またそれ以外の実証研究にも欠かせないものである。

そして、1984年秋には、*The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* を底本としたコンコードダンスが出版される予定である。コンコードダンスが出るということは、そのもととなるテキストが確立されなければあり得ないわけであるが、1969年に出された *The Complete Poems and Plays* をテキストに選んだということは、原則としてこの版をもって以後の定本とするということと考えられる。しかし、本格的なテキスト校訂の仕事には、現存するすべての原稿、校正刷、初出テキスト、異本、現行本を含む膨大な比較校合の作業が伴うのであって、本当に現在の *Complete* 版が、細部に

わたるまで定本として耐えうるものかどうか、疑問が残るのである。

さきに述べたとおり、この1969年版全作品集は、1962年の *Collected Plays* と1963年の *Collected Poems* を合わせたものがその主体であり、この二種は、1957年の Robert L. Beare による “Notes on the Text of T.S. Eliot: Variants from Russell Square” などのテキスト研究を参照してあるとは思われるが、いずれも完全なテキスト批判の作業を経たものではない。最近でも、A. D. Moody が *Thomas Stearns Eliot: Poet* (1979) の Appendix A: About the Text of the Poems の章で、エリオットの意図によるものと思われるものと誤植に類するものとを分けて主要な異同を掲げ、また、詩の意味や音楽性にかかわる重要なことでありながら軽視されているテキストの一面として、詩行、詩句のあいだの spacing の問題を指摘している。

こうした異同は、一般読者の立場からは異本とするに足らない punctuation や capitalization, hyphenation の異同に関するものがほとんどであるが、1925年の *Poems 1909-1925* 以来、エリオットの詩集のイギリス版はすべて、彼が長年勤めた Faber and Faber から出ているにもかかわらず、未だにかなりの数の細かい異同を残している。Beare の論文の副題を借りて言えば、“Variants from Russell Square” は未だ完全に校訂されてはいないということである。(ところで、現在の Faber and Faber は Russell Square ではなく Queens Square にあることを申し添えておく。)

ロンドンの Faber and Faber が、このコンコードダンスの出版を、はじめ1983年春と予告しながら、これが大幅に遅れているのも、おそらくこの本文確定上のいくつかの問題があるからではないかと推測されるが、ここではこれ以上この問題には立ち入らない。ただ、こうした問題の代表例としてひとつだけ、*The Waste Land* の102行目 “And still she cried, and still the world pursues,” (下線筆者) を挙げておく。筆者は、以前からこの “still she cried” という過去形に疑問を持っていたが、ムーディによれば、初出および初版以来のすべての版に見られるこの “cried” は誤りで、*Collected Poems 1909-35* の校正刷に見られるエリオット

の指示に従って“*And still she cries*”が正しいのではないかと指摘する。これなら、同じ行の“*and still the world pursues*”と対応して疑問は起らない。しかし、1971年に出版されたこの詩のタイプ原稿を見ると、初出および現行のものとはほぼ同じ“*And still she cried (and still the world pursues)*”となっていて、これはいずれを採るか、大変複雑な問題である。というのも、のちに述べる John Hayward のエリオット・コレクションの中に保存されているこの *Collected Poems 1909-1935* の校正刷は、この詩についての他のいくつかの指示、たとえば13行目の“*arch-duke's*”を“*archduke's*”と正し、また259行目の“*O City city*”を“*O City City*”と指示する点ではタイプ原稿と一致していて、この校正の持つエリオットの裏付けの強さを証拠付けるからである。この例ひとつからもわかるように、校訂の作業は機械的な処理のできない、時間のかかる仕事である。なお、*The Waste Land* のテキストの問題に関しては Daniel Woodward の“*Notes on the Publishing History and Text of The Waste Land*”が詳しく、これによれば、ファクシミリで出版されたタイプ原稿以外にも、3種の *printer's copy* が現存していることが指摘されている。

## II

さて、この論文の主眼は、エリオット関係の公刊されない研究資料、つまり発表されたテキスト以外のさまざまな第一次資料および伝記的資料を多く所蔵する、二つの代表的なコレクションの概要を明示し、そのうちの、筆者が実地に関覧調査できた一部についての簡単な報告を行うことであるが、こうした内容に入る前に、一般的に研究資料と呼ばれるものの範囲をここで確認しておきたい。

まず、資料は、作者自身によって残されるものと、作者以外の人々によって残されるものとに分類できる。

### A 作者自身によって残された諸資料

- A-0 校訂作業を経て確立されたテキスト (Collated Edition)
  - 1 発表された諸テキスト (Published Texts & Editions)
    - a 初出以後の異同を含むテキスト (Texts with Variants)
    - b 初出テキスト (Earliest Text, First Edition)
  - 2 校正刷 (Galley Proof) および印刷用完成原稿 (Printer's Copy)
  - 3 原稿 (Manuscripts), 草稿 (Drafts)
    - a 発表された作品の原稿, 草稿 (未発表部分を含む)
    - b 未発表作品の原稿, 草稿, あるいは校正刷
  - 4 作品テキスト外の諸資料
    - a 作者自身のさまざまな文章
    - b 手紙
    - c インタビュー, 講演記録等
    - d 自作朗読の記録, レコード等
    - e 蔵書および蔵書への書込み
    - f 写真その他所持品

### B 作者以外の手による主として伝記的資料

- B-1 作者の家族に関する公私の記録, 資料
  - a 家族, 本人についての公式の記録, 文書等
  - b 家族によって書かれ, 発表された文章
  - c 手紙その他, 本来公表されないもの
  - d 作者およびその家族の公私にわたる写真
- 2 作者の友人, 知人等による公私の記録
  - a 周辺的人物による回想, エッセイ等, 発表されたもの
  - b 周辺的人物の手紙, 日記等, 本来私的な文章
  - c 周辺的人物についての伝記的記述で作者に関連のあるもの
  - d 作者に関係のある写真

この論考で扱うのは、主としてA-2からA-4, そしてB-1, つまりギャラップの *Bibliography* の扱う範囲外のものである。対象となるのは、アメ

リカの代表的な二つのエリオット・コレクションであるが、イギリスにおける主要なコレクションとしては、ケンブリッジの King's College に所蔵される John Hayward のコレクションが挙げられる。これは、エリオットが永年にわたって友人ヘイワードに手渡していた原稿、初版本、所蔵本等の資料であり、特に後期の詩劇と *The Four Quartets* の研究には欠かせないものであるが、ヘレン・ガードナーの *The Composition of 'Four Quartets'* (1977) で既に詳しく触れられており、また筆者も、1978年に書いた論文“Notes Towards the Understanding of *The Waste Land* (II)” (*Parsica*, No. 6, 91-100) のなかで、このコレクションの目録 *Hand-List of the Literary Manuscripts in the T. S. Eliot Collection Bequeathed to King's College, Cambridge, by John Davy Hayward in 1965* (Cambridge: University Printer, 1973) を引用して概要を述べたので、ここでは繰り返さない。

アメリカ国内にある、ハーヴァード大学およびニューヨーク市立図書館以外の諸資料のリストとしては、MLAのCommittee on Manuscript Holdingsの編集による *American Literary Manuscripts, A Checklist of Holdings in Academic, Historical, and Public Libraries in the United States* (Texas Univ. Press, 1960, 1971) および J. Albert Robbins による、その同名の改訂版 (Univ. of Georgia Press, 1977) の中のエリオットの項が詳しい。これによると、上記の二つをのぞく最大のコレクションは、2020年まで公開されないプリンストン大学のものを別とすれば、テキサス大学のエリオット・コレクションのようである。Beatrice Ricks の *T. S. Eliot: A Bibliography of Secondary Works* (1980) によれば、Alexander Sackton の手になる *The T. S. Eliot Collection at the University of Texas* (Texas Univ. Press, 1975) というカタログがあるそうであるが、筆者は未見である。

### III

#### 1 The Houghton Library, Harvard Univer-

sity

さて、まずハーヴァード大学のホートン・ライブラリー所蔵のエリオット関係資料から述べる。この比較的小さな図書館は、Harvard College Library が所有する稀覯本や原稿等の特別資料を専門に保管し、研究者の調査閲覧に供することを目的とした機関で、その建物は、College Library の主体をなす Widner Library のすぐ東側に位置する。

ここに所蔵されるエリオット関連の資料は、そのほとんどが、彼の兄 Henry Ware Eliot, Jr. (1879-1947) によって集められたもので、エリオットの青年期まで、および彼の両親や兄、姉たちについての資料コレクションとしては他に例をみない包括的なものである。

その内容は、*Murder in the Cathedral* と *The Family Reunion* の原稿、草稿類と、1930年代から50年代にかけてのエッセイのタイプ原稿をのぞけば、手紙や記録文書、母親の作品、家族の手で保存されたエリオットについての新聞雑誌記事の切り抜き、写真といった伝記的資料であり、これらは閲覧上の扱いから二種類に分けられる。

そのひとつは、Reading Room に準備されている T. S. Eliot/Family Papers/The Houghton Library/1963 というタイトルの付いた、16ページにわたる目録 (分類番号 6 MS Am 1691, Restricted) に記載された142点の原稿、手紙類で、これは閲覧上の扱いが“Restricted”となっているように、ロンドンのエリオット夫人の許可 (written permission) を得ないかぎり見ることができない。

もうひとつは、Reading Room での閲覧許可登録の手続きさえすれば、その場でカウンターに閲覧を請求できる伝記的諸資料で、これは閲覧室に続く Index Card Room の Printed Books Catalogue の中に、エリオット関係の貴重本の図書カードと並んで、4枚にわたる Index Card (資料分類番号 \*AC 9/EL 464 Zzx [cards 1-4], およびこの分類資料の Detailed catalogue [Zzy, card 4]) があり、まずこの4枚のカードにその全体が簡略に記載されている。このコレクションの由来を説明する1枚目のカードの記述を以下に引用す

る。

Collection of miscellaneous material relating to T. S. Eliot: geneological and biographical records, photographs, newspaper & magazine clippings, etc., etc.; begun in 1917 by H. W. Eliot, jr., and kept until his death in 1947; continued by his wife, Theresa G. Eliot.

そして、以下4枚にわたって、file boxes 1-11 (27.5×40cm)およびポートフォリオ・サイズのもう1箱 (62.5×48cm) [以上 EI 464 Zzx] の内容が記載され、Detailed Catalogue of the above collection, compiled by M. A. Cauchon [EI 464 Zzy]が用意されていることが明記されている。このそれぞれの箱に、大判の紙袋ごとに分類された資料が収められており、この総体は膨大な点数にのぼる。

この二つのグループにわたる資料と、のちに述べる Berg Collection 所蔵の未発表資料などを全面的に活用し、はじめて世に紹介したのが、ゴードンの *Eliot's Early Years* (1979) である。これ以前の伝記的著作には、このホートン所蔵の資料は使用されていないが、それは、エリオットの生前の意志に従った夫人が、協力および資料閲覧を拒んだためと思われる。

Robert Sencourt の *T. S. Eliot: A Memoir* (1971) の編集責任者である Donald Adamson の Foreword の注によれば、エリオットの遺言に加えられていたと伝えられる1963年9月30日付のメモランダムに、遺言執行者は、彼の伝記が書かれることに協力したり、そうした計画に同意を与えてはならない旨明記してあるという。そして、T. S. マッシュューズの *Great Tom* (1974) の Acknowledgements にも、夫人が協力を拒んだこと、そしてそれとともに、どうやらこのころ、彼女が夫の伝記について、ひとつの決定を行ったらしいことが記されている。

つまり、彼女がいくら拒んでも、伝記は次々に書かれて行き、また、不正確な内容やジャーナリスティックな臆測が広まる一方、彼女の死後まで多くの資料を非公開にできない以上、彼女の生前に、エリオットの作品と人間に理解のある人物を

一種の official biographer として選び、その人物に積極的に協力して満足のいく伝記を世に出すことにより、その執筆中およびその出版までの期間、資料公開をその人物一人に制限するというやり方である。(研究を目的に未発表資料の調査を許可した場合、その研究が終了し、出版されるまでは、同一資料は原則として他の研究者には引用を許さないのが慣例である。)こうして、1977年にオクスフォード大学出版局から出されたのが、ゴードンの伝記的研究である。

合計12個にのぼるファイル・ボックスのうち、筆者が実際に見たものは Box 1 だけであるが、この中に、エリオット家に関する文書や、祖父、父親、兄や姉たちに関する手紙や写真その他の資料にまじって、母親 Charlotte の発表した詩のスクラップブックを中心とする、母親関係の資料 (Box 1, envelope 10) がある。この中の、1910年4月3日付の大学卒業を前にした息子への心あたたまる手紙や、スクラップブックの中に切り抜かれて保存された母親の詩については、既にゴードンの研究の数カ所に記述があって (pp. 4-6, 44, 60, 87-7, 94), 母親の書き続けた聖者や予言者、殉教者などを題材とする宗教的モチーフの詩がいくつか、部分的に引用あるいはパラフレーズの形で言及されているが、その数は総数のうちわずかなもので、エリオットの初期の作品、特に次の Berg Collection のところで述べる未発表ノートに記された1911年頃から1914年頃までの、神秘主義的内容と殉教者の姿をテーマとしたいくつかの詩と、母親が新聞につきつぎに発表した詩には、奇妙な類似点と差異とがある。

筆者は、ゴードンの研究が出版されたときから、この母親の詩作とエリオットの作品との関連に注目し、また、まえに述べた “Notes towards the Understanding of *The Waste Land* (II): The ‘Water-Dripping Song’ and Part V” で、エリオットが *The Waste Land* 全体の中で最も優れた部分と信じていた、最終章の “Here is no water but only rock” に始まる29行 (ll. 331-58) と、その部分に対して彼が付けた注の中で引用した Chapman の *Handbook of Birds of Eastern North America* という本の暗示するものについて論じたことがあった。この Chapman の *Hand-*

book というのは、キングス・コレッジのエリオット・コレクションの中にエリオット所蔵本が保存されており、これには母親の筆跡で“Thomas Stearns Eliot. Sept. 26 th 1902”と書かれているが、この本をヘイワードに与えた際（1928年6月18日、エリオット39歳のときである）、エリオットは、この筆跡が母親のものであること、そしてこれが彼の14歳の誕生日を記念する母からの贈物であり、その頃の彼が長い間ほしがっていた本であることを、2行のメモとして書き込んでヘイワードに渡しているのである。

乾ききった荒地の岩場をモチーフとするこの部分に込められた渴きと、聞こえてくるツグミの音が想像させる水の音、そしてそれに暗示される楽園喪失のテーマがひびくこの29行の中の鳥の声の注として、エリオットがなにげなく引用したように見えるこの *Handbook of Birds* を手がかりに、何かを読みとろうとしたのが、そのときの試みであったが、ゴードンの記述だけでは、筆者の想像を例証するに足りなかった。以下で述べるように、実際に引用された詩や手紙の引用部分が少なすぎることから、ゴードンの伝記は、エリオットと母親に共通するモチーフや、母親と息子の幸福で親密な関係を、暗示するだけで終わっているきらいがある。ゴードンによれば、セントルイスには既に産業化の波が押し寄せ、都市生活や政治の墮落を生みつつあったが、エリオットはそうした世界の空気には触れずに、幸福な幼少年期を送ったことが述べられている。

Eliot had a remarkably happy childhood and during his adolescence his mother was likely to have protected him as far as possible from these jarring aspects of the new America. (Gordon, p.14)

この記述は、母や4人の姉たちに囲まれて青年となったエリオットの幸福な家庭環境をうかがわせるこのコレクションの手紙や写真、特に、毎年夏を過ごしたグロスターの海辺の別荘での数多くの写真を見ると実感をもって想像できる。また、いくつかの伝記や、Burtrand Russell および Ottoline Morrell らの自伝や回想録、伝記などか

ら、エリオットの後の生活がかなり詳しく知られるようになった今、もういちど ‘water-dripping song’ のモチーフを考えると、筆者の推測の枠組は、今後の検証に耐えるのではないかと思っている。

さて、母親の Scrapbook の話に戻ると、そのカタログ上の説明は次のようになっている。

Box 1. env. 10. Eliot, Charlotte (Stearns), 1843-1929. Poems by C. C. E. [Charlotte Champ Eliot], mother of Thomas Stearns Eliot, the poet, written mainly for the Christian Register.

Clippings pasted in her personal Scrap Book kept by her, to which she added some poems published by William Greenleaf Eliot, Sr.

続いて、このスクラップに収められた65篇の詩のタイトルが記されているが、このうちゴードンの伝記の中で具体的に触れられているのは9篇、しかしそのいずれも、ほんのわずかの部分の引用にとどめられており、最も長いもので2行半、そして、多くの場合は1行以下か、ほとんどパラフレズの形で述べられているだけである。引用されているもののうち、“Giordano Bruno in Prison” はエリオットの “Prufrock” と、また、“The Master’s Welcome,” “Charade of the Season” および “The Three Kings” は *The Waste Land* と共通のテーマやモチーフを持つことが指摘されているが、引用されていない56篇のうち、“Prufrock” と *The Waste Land* の両方に関連性をもつものとしてもう1篇、“The Raising of Lazarus” というタイトルを挙げておきたい。

この48行からなる詩は、同じページのこの詩の右側に貼られた “Force and God” という作品にブルーのインクで書きこまれた “Aug. 1887” という日付から類推して、ほぼ同年の作品と考えられるが、これはエリオットが生まれる前年である。そして、このスクラップブックに貼られた詩の順番がほぼ年代順であると考えられるならば、この “The Raising of Lazarus” 以前に発表されたものの22篇、以後のもの42篇であって、エリオットが生まれてからも、母親 Charlotte は、次々に詩を発

表し続けていたことになる。ちなみに、“The Master’s Welcome”は13番目、“Charades of the Season”は18番目、“The Three Kings”は27番目の作品として収められている。

このことと、エリオットが16歳のとき書いた“A Lyric”（1905）にまつわるエピソードとして、*Poems Written in Early Youth*（1967）の前書き（“Note”）の中でエリオット夫人が書き残している話とを考え合わせると興味深い。

Two incidents connected with “A Lyric” remained in the poet’s mind. These stanzas in imitation of Ben Jonson were done as a school exercise when he was sixteen. “My English master, who had set his class the task of producing some verse, was much impressed and asked whether I had had any help from some elder person. Surprised, I assured him that they were wholly unaided.” They were printed in the school paper, *Smith Academy Record*, but he did not mention them to his family. “Some time later the issue was shown to my Mother, and she remarked (we were walking along Beaumont Street in St. Louis) that she thought them better than anything in verse she had ever written. I knew what her verse meant to her. We did not discuss the matter further.” (p. vi)

この“I knew what her verse meant to her.”というエリオットの言葉には、掲載されたものだけで60篇を上まわる母親の詩作への情熱と、その情熱の限界を思い起こす彼の気持ちが込められている。このエリオットと母親との精神面および詩作上の深いつながりというテーマは、今後、十分なテキスト上の比較が許されるようになれば試みられるべき重要なポイントであるように思われる。

以上が、エリオットの母親の作品に関する、要点のみの報告である。これ以外の資料で特に重要と思われるものを、未見ではあるがFamily Papersのカatalogからひろってみると、Items (58)-(124) : Miscellaneous correspondence と分類された67通の手紙がある。Catalogによれば、

この中には、エリオット9歳のときの手紙をはじめとし、伝記的に重要な時期にあたる1914年から23年頃までのエリオットの手紙約20通（うち、Harriet Monroeあて9通、パウンドあて1通）を含む。その他は、エリオットの家族、親戚の手紙や友人からのエリオットあての手紙である。

## 2 Berg Collection, New York Public Library

ニューヨーク市立図書館が、*The Waste Land*をはじめとする初期の多くの詩の原稿類を所蔵していることを発表して、英米の研究者を驚かせたのは1968年10月25日のことである。

この図書館のバーグ・コレクションが、もとJohn Quinn所有のこの原稿群を入手していたのは1958年のことであるという。しかし、その事実には、まだ生きていたエリオットにも知らされないまま10年間全く公表されず、これらの原稿をはじめとするさまざまな作家の原稿や近代絵画のコレクターであったジョン・クインの伝記が出版される直前の1968年10月末になってはじめて発表されたわけである。クインの伝記出版の日である11月7日にあわせて同図書館は特別展示を行い、未発表のNotebookや*The Waste Land*の原稿などが一般に公開された。そして翌年3月から、研究者への閲覧が許可されるようになった。このうち、*The Waste Land*関係の57枚の原稿は、1971年になって、そのファクシミリが出版されたので、ここでは論じない。

このバーグ・コレクションに所属する資料は、多くの未発表作品を含む初期の詩（1917年の*Prufrock*詩集と1919年から1920年にかけての*Poems*、そして1922年の*The Waste Land*）の原稿であり、手紙などの伝記的資料は含まれない。手紙等を所蔵するのはManuscript Divisionであり、ここには現在、かなりの数のエリオットの手紙（*American Literary Manuscripts*によれば199通）が保管されている。

クインの死後、遺言に従って、さまざまな人物からの彼あての手紙のうち重要なもののタイプコピーが作られ、13巻に製本されて、1936年12月にニューヨーク市立図書館に寄贈された。1938年からは制限つきながらこれが公開され、その中にエ

リオットの手紙22通と6通の海外電報が存在することが既に知られていた。そして、この中の6通の手紙の文面によって、1922年に確かに、現在バーグ・コレクションが所蔵する原稿類をクインが受け取っていたことが知られていた。しかし、1923年と1924年の、クインのコレクションの競売目録にはこれらが記載されず、1924年のクインの死によって、以後、特に Ezra Pound が大きく手を入れたということが知られていた *The Waste Land* の原稿の所在が大きな謎となっていた。

このバーグ・コレクションの原稿が発表された際、*The Times Literary Supplement* の11月7日号に Donald Gallup による “The ‘Lost’ Manuscripts of T. S. Eliot” という書誌的紹介が掲載され、これに手が加えられて、*The Bulletin of the New York Public Library* の12月号に同名の論文が収録された。以後、この原稿をめぐるさまざまな文章が書かれているが、この資料全体にわたってのこれ以上まとまった書誌的記述はないようで、エリオットの原稿を求めて訪れる研究者に目録として手渡されるのも、12ページにわたるこの論文である。

ここでは、このギャラップの記述をもとに、主としてエリオットの未発表の Notebook に収められた作品のみについて述べることにする。ノートブック以外に、さまざまな紙に書かれた、主として1920年の詩集に関連する56枚の原稿が存在するが、これらはいずれも未見であり、筆者が実際にメモをとったのは、このノートに書き込まれた詩のみである。なお、バーグ・コレクションの閲覧室で資料を請求すると、まずこれらの原稿のゼロックス・コピーを手渡されるが、解読その他の理由で必要な場合は、特別な手続きなしで実物を請求することができる。

さて、この Notebook は20.5×17cmの、はじめから製本されていたノートで、茶色のコーネル付き背革製、そして天、地、小口の三面が大理石になっているものである。表紙の裏側に残る、店の小さなラベルから、エリオット家の別荘のあるグロスターで購入されたことがわかるが、その時期は1910年の1月から4月の間であると推測される。そして、この年の秋に、エリオットはパリに留学している。

彼ははじめ、このノートのタイトルの “INVENTIONS/OFF THE/MARCH HARE” とし、表紙をめくって2枚目の遊び紙に、この字を大きく書き込んでいるが、のちにこれを横線で消している。そして、その前の見返しにあたる遊び紙に、新しく、“COMPLETE POEMS OF/T. S. Eliot.” と書き、その下に、現在われわれが *Prufrock* 詩集に見ることのできるのと同じ Jean Verdenal への献辞（ただしダンテからの引用文が、今のものより1行だけ多い）が記されている。

このノートは、本来74枚144ページを含んでいはずであるが、12枚24ページ分がエリオットにより切りとられており、また空白のままのページがいくつもあって、実際に詩が書き込まれているのは52ページ分である。

この52ページと、間に挿入された5枚の紙に書かれた詩の総数は34、そのうち発表された詩の部分をなすもの12点で、これは現在の詩の形で言うと6篇（*Conversation Galante*, *Preludes*, *Portrait of a Lady*, *The Love Song of J. Alfred Prufrock*, *Morning at the Window* と、*Poems Written in Early Youth* に収められた *Humouresque*）となり、残りの22点が未発表作品である。

この22点は、ゴードンの *Eliot's Early Years* の中ですべて触れられているが、これらは、さきの母親の詩の場合と同じく、あるいはそれ以上に、ほんのわずかの部分的引用しか行われておらず、ライブラリアンの話によれば、現在のところそれがエリオット夫人の方針であるという。従って、よほどの論点を持たないかぎり、これらの未発表作品の引用は許可されないだろうと思われる。

このノートを実際に見て、一番印象に残るのはパリ渡航ののちに起きた、エリオットの筆跡の変化である。ゴードンも指摘するように、パリでの留学生活の約2カ月目にあたる1910年11月頃、エリオットの筆跡は大きく変化するのだが、気にかかるのは、この変化が大変明確なことである。この変化は、執筆の時期が記入されていない作品の成立年代を推定する手がかりとなるのであるが、1910年11月以前の彼の字は、現在出版されている *The Waste Land* のファクシミリに見るように、かどの丸い、横の流れを印象づける尾を引いた小



さな字の連なりであって、これが11月以降は、ゴードンが“spiky Paris hand”と呼ぶ、タテに長く上がった、垂直の線の流れを強調した字に変わるのである。

1910年10月という日付が加えられている、15ページ目の“Preludes in Roxbury”までは、それまでの彼の字とほとんど変わらないが、1910年11月の日付が書き込まれている“Portrait of a Lady, I”の頃からこの傾向が始まり、“Prufrock among Women”という副題の付いた“The Love Song of J. Alfred Prufrock” (n. d.)の最初の部分や、“Interlude in London” (1911年4月)などに、その傾向が著しい。そして、興味深いことに、筆跡上の変化が起きたちょうど1年後、つまり彼がハーヴァードのもとに生活に戻った頃には、彼の筆跡ももとに戻っているのである。そして、この時期以後、1914年までの約2年間、彼の詩作は空白期をむかえるのである。

こうした変化をどう考えるかということは、詩の内容というテキストの事実と、彼の生活というテキスト外の事実を併せて解釈するしかないが、そのきっかけと考えられる事情は、現在の段階では特定できない。のびやかな言葉の流れとひびきを感じさせる独特の音楽を持った、この“Portrait of a Lady”と“Prufrock”とを中心とする一時期の詩に、筆跡上の著しい特徴が見られること、そして、ニューイングランドに戻って以後、詩作の勢いがほとんど失われてしまったことを考えると、パリの生活が若き日のエリオットに与えた影響の大きさというものを考えざるをえない。そして、この変化の背後に、パリの環境という一般的要因だけでない、何か特別な変化があったのかどうか、さまざまな推測を呼ぶところである。

最後に、この点だけは指摘のプライオリティを確保しておきたいのだが、それは、このノートに書き込まれた作品のタイトルに、音楽の形式を指す言葉や、楽曲の型を示す言葉が、かなり多用されていることである。晩年の*Four Quartets*に見られる、音楽形式に模した詩の枠組という点は、既に論ずるまでもないことであるが、最初期のこれらの詩に見られる、音楽に関連したタイトルの多用という事実は、指摘するに足ることと思われる。

る。以下、このノートに書かれた詩および同時期の作品のタイトルを列記する。

First Caprice in North Cambridge  
Fourth Caprice in Montparnasse  
Opera  
Prelude in Roxbury  
Interlude in London  
Interlude in a Bar  
Suite. Clounesque, I-III  
Humouresque  
Barcarole  
Rhapsody on a Windy Night  
The Love Song of J. Alfred Prufrock

エリオットの作品の音楽性、また彼が詩作上の根本的な関心として持っていた音楽芸術との類縁関係というものは、“Music of Poetry” (1954) という後年のエッセイから考えても、かなり重要な考察点であり、筆者はいずれ、*The Waste Land* のもつ今世紀初頭の音楽（特にストラヴィンスキー）との類縁性を論じてみたいと考えている。

以上が Berg Collection 所蔵の未発表ノートについての観察である。ここでは論点を列挙したにとどまるが、このうちのいくつかについては、また稿を改めて論じたいと思う。

## Bibliography

- Beare, Robert L. “Notes on the Text of T. S. Eliot: Variants from Russell Square” *Studies in Bibliography*, 9 (1957), 21-49.
- Browne, E. Martin. *The Making of T. S. Eliot's Plays*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1969.
- Eliot, T. S. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- Eliot, T. S. *Poems Written in Early Youth*. London: Faber and Faber, 1967.
- Eliot, Valerie, ed. *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts*. London: Faber and Faber, 1971.

- Gallup, Donald. *T. S. Eliot : A Bibliography*. London : Faber and Faber, 1969.
- Gallup, Donald. "The 'Lost' Manuscripts of T. S. Eliot" *Bulletin of the New York Public Library*, 72 (1968), 641-52.
- Gardner, Helen. *The Composition of 'Four Quartets'*. London : Faber and Faber, 1978.
- Gordon, Lyndall. *Eliot's Early Years*. Oxford : Oxford Univ. Press, 1977.
- Hand-List of the Literary Manuscripts in the T. S. Eliot Collection Bequeathed to King's College, Cambridge, by John Davy Hayward in 1965*. Cambridge : University Printer, 1973 (not for sale).
- Matthews, T. S. *Great Tom : Notes towards the Definition of T. S. Eliot*. New York : Harcourt Brace, 1974.
- Moody, A. D. *Thomas Stearns Eliot : Poet*. Cambridge : Cambridge Univ. Press, 1979.
- Ricks, Beatrice. *T. S. Eliot : A Bibliography of Secondary Works*. London : The Scarecrow Press, 1980.
- Robbins, J. Albert, ed. *American Literary Manuscripts : A Checklist of Holdings in Academic, Historical, and Public Libraries in the United States*. Athens : Univ. of Georgia Press, 1977.
- Woodward, Daniel H. "Notes on the Publishing History and Text of *The Waste Land*" *The Waste Land : A Casebook*. Eds. C. B. Cox and Arnold P. Hinchilliffe. London : Macmillan, 1968.

### Acknowledgements

本稿で論じた資料を調査したのは、1982年8月下旬から9月上旬にかけてである。閲覧を許可して下さったハーヴァード大学ホートン図書館ならびにニューヨーク市立図書館バーグ・コレクションの関係各位に厚くお礼申し上げる。

I gratefully acknowledge permission given by the curators of the Houghton Library, Harvard University, and the Berg Collection, the New York Public Library, to consult the unpublished materials in their holdings. Also I am thankful to the librarians who gave me helpful information during my research in August-September, 1982.

Hidehiko Shindo